

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：12201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2015

課題番号：23720227

研究課題名(和文) 平安期日本語主語標示の形態論的研究

研究課題名(英文) Morphological Study of Subject Marker in Early Middle Japanese

研究代表者

高山 道代(Takayama, Michiyo)

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：70451705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は平安期日本語をテキストとして古代日本語の主語名詞について語彙的意味および語形態の両観点から分析および記述することを目的としたものである。本研究における調査によって動詞述語とむすびつく主語名詞の諸語形態(名詞、名詞ノ、名詞ガ)の文法的意味を整理し、その機能分担の様相をより明らかなかたちで提示することができた。

研究成果の概要(英文)：In this research nouns used as subject in the text of Heian Period are described and analyzed from the two points of view: categorical meaning and word form. Also, explicated are the grammatical meanings of three word forms (noun-, noun-no, noun-ga) used as subject which are connected with a verbal predicate.

研究分野：日本語学

キーワード：主語標示 対象語標示 動詞述語 語形態 語彙的意味

1. 研究開始当初の背景

現代日本語において助辞を付与しない形態(名詞-)を他の助辞付与形態とともに格標示形態の一つとしてみとめ、格標示機能を体系的にとらえようとする研究はすでにおこなわれていた(鈴木重幸1972『日本語文法・形態論』むぎ書房)にも関わらず、その研究の意義は、いまだ十分に理解されていない状況にあった。

古代日本語における動詞述語とむすびつく主語や対象語の格標示の機能は助辞の付与されない形態(名詞-)および助辞付与形態によって機能分担されており、各形態の用法については先行研究により明らかにされつつあるものの、体系的な整理がいまだおこなわれていない状況にあった。さらに、形容詞述語とむすびつく主語の格標示機能についても詳細な研究が待たれていた。

2. 研究の目的

古代日本語における動詞および形容詞を述語とする場合の主語の諸形態(名詞-、名詞-ガ、名詞-ノ)の用法を対照し、平安期日本語における主語標示機能について体系的に捉えることを目的とする。

3. 研究の方法

連語論的手法を用い、動詞述語および形容詞述語の主語標示機能について、これまでおこなってきた研究成果を体系的に整理し、語彙的意味と語形態の双方の観点から分析をおこなう。

4. 研究成果

動詞述語とむすびつく主語名詞の諸形態(名詞、名詞ノ、名詞ガ)の文法的意味について体系的な整理をおこない、その機能分担の様相をより明らかなたちで提示することができた。その一方で、

形容詞述語とむすびつく主語名詞については感情的な状態をあらわす形容詞の一部を分析するとどまっておき、動詞を述語とする場合の主語の諸形態の用法との対照も含め、今後の研究課題として引き継ぎたい。

本研究における分析および考察の内容を端的にとりあげると以下ようになる。

1)主体表現と客体表現の分布の様相から、主体表現では活動性名詞と変化動詞のくみあわせが、一方の客体表現では不活動性名詞と作用動詞のくみあわせが多く現れることが確認される(表1)。

表1 主体変化と客体変化の連語における主語と対象語の現れ

	主語		対象語	
	名詞	名詞ノ	名詞	名詞ヲ
物	54	44	240	164
人	92	40(+ガ3)	32	55
身体	96	7	66	28
事(現象含む)	324	69	157	181

このことから、主体表現と客体表現の関係は一つの意味格に還元できるような性質ではないといえ、主語名詞と自動詞/対象語名詞と他動詞といった統語構造上の対応関係が常になりたつとは限らないことが考察される。

2)主語標示、対象語標示の各機能をになう名詞の諸形態の分布の様相から、主語標示、対象語標示双方において名詞がより中心的な用法に、名詞ノ、名詞ヲなどの有助辞格はより周辺的な用法において多くみとめられる(参考 表2)。

表2 「物の変化」をあらわす主体変化 / 客体変化の連語における主語および対象語の名詞の格形態

名詞の語彙的意味	主体変化		客体変化	
	名詞	名詞	名詞	名詞
物	14	19	218	58
自然物	19	20	7	25
現象(物)	21	5	11	14
動物	0	0	4	4

上記表は「物の変化」をあらわす主体変化および客体変化の連語における主語と対象語それぞれの名詞の格形態をまとめたものである。「物の変化」をあらわす主体変化の連語では活動名詞が主体にたち、その自発的变化が表現されることが多く、その場合、主語標示には名詞 が用いられる傾向がある。また、「物の変化」をあらわす客体変化の連語では不活動名詞が客体にたち、他からはたらきかけを受けて生じる変化が表現されることが多く、その場合、対象語標示には名詞 が用いられる傾向がみとめられる。このように「物の変化」をあらわす連語に限ってみても、無標形態である名詞 と有標形態である有助辞格が機能的側面においても無標性と有標性という特徴をもって対立の様相をみせていることがわかり、機能分化の傾向が指摘できる。

3) 有助辞格の用法についてさらに検討を加えると、名詞 という無標形態がもつ意味機能(中心的用法)との差を明示したことにより、有助辞格という有標形態による周辺の用法の意味機能が拡張してきたことがうかがえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

高山道代 2012 「平安期日本語における感情的な状態をあらわす形容詞を述語とする文の対象語についての一考察」『対照言語学研究』第22号

高山道代 2013 「平安期日本語の対象語表示の名詞-ヲ再考」宇都宮大学『外国文学』第62号

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

高山道代 2014 『平安期日本語の主体表現と客体表現』ひつじ書房

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高山道代 (TAKAYAMA Michiyo)

宇都宮大学、大学院国際文化交流研究講座
准教授

研究者番号 : 70451705

(2)研究分担者

()

研究者番号 :

(3)連携研究者

()

研究者番号 :